

	京都大学 理学分野
学部等の教育研究 組織の名称	理学部（第1年次:311） 大学院理学研究科（M:318 D:166） 大学院生命科学研究科（M:75 D:33） 化学研究所 生存圏研究所 基礎物理学研究所 数理解析研究所 霊長類研究所 生態学研究センター 野生動物研究センター
沿 革	明治30（1897）年 京都帝国大学理工科大学創立 大正3（1914）年 理工科大学が分けられ理科大学、工科大学となる。 大正8（1919）年 理科大学が理学部に改称される。 大正15（1926）年 化学研究所設置 昭和28（1953）年 大学院理学研究科、基礎物理学研究所設置 昭和38（1963）年 数理解析研究所設置 昭和42（1967）年 霊長類研究所設置 平成3（1991）年 生態学研究センター設置 平成11（1999）年 大学院生命科学研究科設置 平成16（2004）年 生存圏研究所設置 平成20（2008）年 野生動物研究センター設置 平成22（2010）年 化学研究所、生存圏研究所、基礎物理学研究所、数理解析研究所、霊長類研究所、生態学研究センターが共同利用・共同研究拠点に認定 平成23（2011）年 野生動物研究センターが共同利用・共同研究拠点に認定
設置目的等	明治30年、京都大学理学部・理学研究科の前身である京都帝国大学理工科大学は、日本の近代化を進めるため、理工系人材の社会的需要に応えることを目的として設置された。その後、数々の改組を経て現在の理学部・理学研究科になるとともに、学際領域の発展により、生命科学研究科も設置したほか、高度かつ独創的な理学分野の研究を進めるため、共同利用・共同研究拠点である化学研究所、生存圏研究所、基礎物理学研究所、数理解析研究所、霊長類研究所、生態学研究セン

	ター、野生動物研究センターを設けている。
強みや特色、社会的な役割	<p>京都大学の理学分野は、建学以来の「自由の学風」のもと自然界の普遍的な原理や法則の探求を通じて各領域で学問の源流を形成し、現在まで連なる学問の系譜を創りあげてきた。それらの成果は、5名のノーベル賞受賞者、2名のフィールズ賞受賞者等の形で世界的に評価され、常に我が国の理学分野の発展を先導してきた。現在は、これらの歴史と実績を継承発展させ、一層充実した研究・教育・社会貢献活動を展開しており、以下の強みや特色、社会的な役割を有している。</p> <p>○ 物事を俯瞰する幅広い視野と教養、高度な数理能力、自然科学の体系的・先端的知識、それらを柔軟に応用する能力、更には既存の見方にとらわれない自由な発想力を身につけさせる教育を展開する。</p> <p>以上のことを通じて、深い学識と研究能力・考察力・発信力を有し新たな知的価値を創造する高度な研究人材及び様々な社会課題に柔軟かつ的確に対応できる高度な専門人材を養成する役割を果たす。</p> <p>○ 既存の学問領域にとらわれない一学部一学科制のもとで学生の多様な興味・能力を最大限に伸ばすオーダーメイド型教育カリキュラム、複数指導教員制、英語運用力養成プログラム、英語のみで学位取得が可能な履修プログラム、学生に学術集会を企画運営させ自立性のある研究者を育成する教育等の特色ある各種教育事業を進めてきた実績を生かし、広い視野に立った学生の自律的学修を奨励しつつ国際的水準を踏まえた教育改革を進め、学界・産業界等においてグローバルリーダーとして活躍できる理学系人材の養成に向けて不断の改善・充実を図る。</p> <p>○ 数学・数理科学、物理学・宇宙物理学、生物科学・生命科学などに代表される極めて高い研究実績を生かし、分野横断的な連携のもと新たな学問の創造を目指し、世界トップクラスの研究を推進する。</p> <p>さらに、染色体、細胞接着、脳神経、細胞のがん化・老化・神経変性に関わるシグナル伝達研究、最先端化学分野の研究を通じた機能性新物質の創製、最先端の大型装置を用いたレーダー大気科学及び宇宙太陽発電の基礎研究開発、素粒子論や重力波物理学分野の展開に代表される世界水準の理論物理学研究、数学理論の創造を始めとする数理解析の総合的研究、くらし・からだ・こころ・ゲノムの</p>

観点から「人間とは何か」を探る霊長類の生物学的解析、安定同位体元素の測定等の手法を用いた生物多様性研究・生態系解析の高度化、絶滅危惧大型動物を中心とする国際的な野生動物保全研究、など世界に誇る独創的かつトップレベルの研究の一層の深化と展開を図り、関連分野の国際研究拠点としての役割を果たす。

- 学会・政府関連委員会活動のほか、研究成果の知的財産化や民間企業との共同研究、更には近畿圏で本学が中心的な役割を果たしているスーパーサイエンスハイスクールにおける取組等を一層強化することにより、研究成果を社会に還元する方策を充実させる。
- 社会人の研修の受入等を更に進めるとともに、本学理学分野が求められる社会人学び直しのチャンネルの一層の深化と拡大を図る。
- 理学分野として、小中高生へのアウトリーチ活動により理数教育への貢献や高大接続の緊密化に資するとともに、海外大学等との学術交流協定や留学生の受入・派遣の拡大を図り、国際交流を推進する。これを支える全学的な取組として、外国人教員の学部・研究科への配置等を通じ学部教育全体のグローバル化を行うことにより、英語力や教養力を強化し、それらを生かして国際的に活躍できるグローバル人材を育成する体制を整備する。また、本学の理念に基づき一層充実した教育研究が可能となるよう、教育研究組織の再編を通じて全学的な連携・協力体制を構築し、本学の機能強化へとつなげる。